

漢法苞徳塾資料	No. 196
区分	治療論
タイトル	治療の手掛かり
著者	八木素萌
作成日	1991.05.16

◎治療の手掛かりを求めるのが辨証である。従って、何処を（或は何を）・どのように・どんな具合に・どんな方法で・治療したら良いのか？を把握する為に行なっているのが辨証であり、その辨証に到達する為に各種の診察法（四診法）を行なっているのである。

このような辨証の中身を考察して見れば……

- a. 病んでいる臓腑は何処か？
- b. 病因は何か（外因か・内因か・不内外因か）？
- c. 体成分的には何に問題があるか（衛・気・榮・血）？
- d. 五体論的には何れが問題を起こしているか（皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・骨）？
- e. 三陰三陽論的には（病位論的）何が問題か？  
また、それは経病か腑病か？  
または、合病か？・并病か？・壊病か？伝経か？直中か？
- f. 病の経脈論的（皮部・絡・大絡・奇経・経筋・経脈・臓腑）な意味は？
- g. 患者の体質的・気質的な特質と病との関係は？
- h. 病の性質（熱〈温・伏暑〉・寒〈涼・冷〉・真寒仮熱・真熱仮寒・痺・痞・煩・結胸・その他など）や、病程（初期・発展期・中期・収束期・末期・転換期〈良化・悪化・質転換〉・安定期など）はどうか？

たとえば、「喉が乾く」という主訴に対して、

- ・「口をすすげば良いのか」

〈口腔内のみの乾燥感～唾液分泌の不良・口腔内の津液疎通の不良・口腔内のみの熱或は炎症～耳下腺や唾液腺の検討や：胸鎖乳突筋の検討や：口腔内粘膜や歯齦の炎症や齲歯は無いかの検討：などが必要、なお寒熱の検討は不可欠〉、

- ・「飲み物を飲めば収まるのか」

〈単純な補津で良かったのであるから発汗過多乃至は何らかの津液を失う状態が一過的に起こった事を意味する、但しこういう状況がしばしば起こっている場合には何故そうなるのかが解明されなければならない〉、

- ・「いくら飲んでも乾きは収まらないのか」

〈まさに消渴であるが消渴には三種類がある、中焦の熱・上焦の熱・下焦の熱の何れであるかや：多くは虚熱であるが、実熱の激しい乾きもあるので、間違わないように診る必要がある〉、

- ・「冷たいほうが良いのか」  
〈体に実熱または胃熱がある〉、
- ・「温かいほうが良いのか」  
〈体に冷えまたは胃冷がある〉、
- ・「飲み物は欲しくないのか」  
〈裏に邪実があり陰の邪である〉

などが確かめられなければならない。また、関連する症状も上の例のように解析しなければならない、全身的な症状を解析して病の統一的な全体像として把握しなければならない。それは諸症状を一貫した論理において合理的に説明出来るであろう。「喉は腎経」「乾きには補水」「喉の痛みは喉痺」というように軽率に結論できないのは明瞭であろう。

上のように多面的に考察し、四診法による病態把握を総合的に解析するには、各種の辨証が総合的に駆使される必要がある。そのようにして、病態を医学理論に基づいて認識するのである。つまり、病を東洋医学の理論に従ってイメージしているのである。故に、「病のイメージング」と言う次第である。「〇〇証」と命名する前に「病のイメージング」が行なわれていなければならないと主張する所以である。

#### ◎治則の問題

- a. 緩急の序列と選択の基準
- b. 温法と冷法と清法、その選択の基準
- c. 汗法と下法と和法と吐法、その選択の基準
- d. 補法と瀉法と疎通法、その選択の基準
- e. 理血法と駆瘀血法と破血法の問題
- f. 醒腦開竅法の問題
- g. 回陽固脱法の問題

湯液による治療の場合はこれらに対応する薬方の選択が問題である、然し、鍼灸治療では上記のような治法は如何にして実現するのか？が実践的問題であり、九鍼のような鍼の種類選択や、燔鍼法と刺絡法と繆刺法と巨刺法などのような、あるいは鍼運用の各種の技法などの選択の問題が、やはり優れて臨床実践の問題であるから、その選択基準の問題も大きな課題であろう。

- ◎病を経絡の変動という角度においてのみ把握するので良いのか？は極めて重要であろう。臓腑の変動と病因の表現としての反応が、病症構造をとって現象するのが病の実態である、そして体表に見られる各種の反応が、如何なる部位にあるのかという問題の一環として経絡的反応が存在しているものと言う把握こそが、重要なものである。病の性質や病因や病んでいるものと切り離して「経の変動」を把握しても、どの経脈のどの穴を用いどのような手技手法を施すべきかは導き出せない。従って、今日では「経脈の虚実の変動をのみ捉えれば鍼灸の治療には充分である」という理解は、あまりにも不

十分で偏ったものである、ほとんど誤謬であると強調しなければならないのである。という事は、諸反応を陰陽五行的に臓腑の変動と病因の表現として把握しなければならないのだ。此処に漢法的な診断の最重要点がある事を強調すべきである。

### ◎気血の判定問題では

『鍼灸問対』（元：汪機）に「病ノ気分ニ在ルモノハ遊行シテ不定 病ノ血分ニ在ルモノハ沈著シテ移ラズ」「病風ヲ以テ之レヲ言エバ……移動シテ常ナラザル者ハ気分ナリ、……著シテ走ムカザル者ハ血分ナリ、凡ソ病ハ皆然ラザルモノ莫シ」と言う。そして「病ノ気分ニ在レバ」「上有病 下取之 下有病 上取之 在左取右 在右取左」、「在血分者 随其血之所在 応病取之」と記述している。

### ◎補瀉の決定問題

『難経』「八十一難」には補瀉の決定は病の虚实によれと言う。病の虚とは病勢は遅滞して緩慢で症候も不明瞭で発症の様子も時期も定かでは無いもの、病の実とは病症候も変化も発症も激甚明確なもの、と「四十八難」に記述している。また『鍼灸問対』は『内経』の説「形氣不足 病氣有余 是邪勝也 急瀉之 形氣有余 病氣不足 急補之…形氣有余 病氣有余 此陰陽俱有余也 急瀉其邪 調其虚实」を引用して「病氣不足」について補足説明を加えている。「夫レ形氣トハ 氣ハ口鼻中ノ喘息ヲ謂ウモノナリ 形ハ皮肉筋骨血脈ヲ謂ウモノナリ 形ノ勝ツモノハ有余ト為ス 消瘦スルモノハ不足ト為ス 其ノ氣ハ 口鼻中ノ氣ニ審ラカナリ 労役シテ故ノ如キモノハ 氣ノ有余ト為スナリ 若シ喘息シテ 氣促シ 氣短ニ 或ハ以テ息スルニ足ラザル者ハ 不足ト為ス 故ニ曰ク 形氣ナルハ 乃ワチ人ノ 身形中ノ氣血ナリト 補スベク瀉スベキハ 此レニハ在ラズシテ 只ニ病ノ来潮シテ之レヲ作スノ時ニ在ルナリ……精神困窮シテ 語言ハ無力オヨビ懶語ノ者ハ 病氣不足ト為スナリ 乃ワチ真氣ノ不足ナリ 急イデ当サニ之レ補スベシ…」とあって平明である。

### ◎基本鍼法（手技）とその選択問題

五臓に应ずる刺法、五体に应ずる刺法、四海刺法などは、病の深さと体成分の治療の刺法であろう。

補法の手技手法は温補・清補・調和・平補・理氣・調氣・和強急などに分類できよう。

瀉法の手技手法は瀉熱・清熱・導排泄・壊決・壊血・瀉出・理血・緩結・解強急などに分類できよう。

同時にこれらの補瀉手法は接触・浅刺・深刺・水平刺・斜刺などの、施鍼の深浅においても施術目的に対応させられるであろう。

此のほか、刺絡と燔鍼（焮刺）の格別な治効作用の適宜な運用と、毫鍼ほかによる経脈疎通刺法や導血氣刺法や輸氣血刺法や、湯液の八陣（八法）に対応した治法刺法手技も選定される。

### ◎外感病の治療と撰穴問題……

### ◎内傷病の治療と撰穴問題……